

真理は“ヘブライ語”原典にあるか？

一書評 加藤哲平著『ヒエロニムスの聖書翻訳』（教文館、2018年）一

飯郷友康

はじめに、少々長くなるが、本書の「まえがき」と「あとがき」を併せて抜粋する。

西洋美術に関心のある人であれば、美術館や展覧会などで一度ならず、本書の主人公であるエウセビウス・ソフロニウス・ヒエロニムス(347-420年)を描いた絵画を見たことがあるのではないだろうか。あるときはどくろの置かれた書齋で研究に没頭する賢者として、またあるときはライオンを従えて荒野で修行する裸形の修道者として、またあるときは緋色の礼服を身にまとった枢機卿として、ヒエロニムスはあなたの前に現れたことがあるかもしれない。[中略]

本書には、どくろもライオンも緋色の礼服も登場しない。そうした夾雑物によって偶像化された聖人ではなく、古代末期の地中海世界で実際に生きていた生身の人間としてのヒエロニムスを描き出すことを試みたいのである。ヒエロニムスは、[中略]福音書のラテン語訳テキストを改訂し、旧約聖書の全文書をヘブライ語からラテン語に翻訳するという比類なき偉大な仕事を成し遂げたが、[中略]自らの思想を、「ヘブライ的真理 (Hebraica veritas)」という言葉で表わした。すなわち、旧約聖書のヘブライ語テキストにこそ聖書の真理が存するという思想である。このヒエロニムス独特の思想のロジックを解明するために、我々は彼の翻訳論と、新約聖書における旧約引用の理解とを手がかりとする。

本書を読んだ読者が、次に聖人ヒエロニムスの絵画と対峙するとき、そこに人間ヒエロニムスを取り巻く世界を感じ、その思想を想い、その言葉を聞き取ることができるようになるとすれば、筆者の試みは成功したことになるが、はたしてどうだろうか。（「まえがき」3-4頁）

筆者が[中略]初めて彼の文章を原典で読んだのは、まだ研究テーマも定まっていない修士の1年目(2008年)のことだったと記憶している。学部の

ときに勉強したラテン語を錆びつかせないために何かよい読み物はないものかと探していた筆者は、ふとウルガータ聖書を手に取り、なぜか聖書本文ではなく、その冒頭に付されたヒエロニウムスなる人物の序文を読み始めたのだった。そして、キケローを思わせるややペダンティックだが美しく整った文体と、現代の学者も顔負けの該博な文献学的知識に、たちまち魅了されてしまった。それ以来、懲りずにヒエロニウムスの文章を読み続けている。

筆者自身のヒエロニウムス研究は、上のような個人的な関心に基づいて始められたわけだが、期せずしてと言うべきか、近年では筆者と同じようにヒエロニウムス研究に可能性を感じる研究者が次第に増えてきたように見受けられる。[中略]本書は、筆者の知る限り、初めて日本語で書かれたヒエロニウムスに関するモノグラフである。[中略]ヒエロニウムス研究の最前線の熱気と共に、時代を超えて読み継がれていく強度も備えていることを、ひとえに祈る次第である。（「あとがき」321-322頁）

以上、著者自身の言葉に本書の特長は要領よく説明された。

以下、あらためて、加藤哲平『ヒエロニウムスの聖書翻訳』を論評する。

評者の専門はユダヤ説話学で、個人的な関心は「実際に生きていた生身の人間」よりも「夾雑物によって偶像化された聖人」に向かいがちなのだが、それでも本書には大いに興奮した。つまり、著者の言う「ヒエロニウムス研究の最前線の熱気」に当てられて、本書の意図を誤解、曲解した点多々あるのではないかと反省する。そこらを含めて、御参考いただきたい。

本書の全体は、端正な三部構成（各3章）を採る。

論題は単純明快で、まず「ヒエロニウムスは聖書解釈者として、教父たちの中でどの程度のオリジナリティを持っていたのか」、また「聖書翻訳者として、どの程度のヘブライ語能力を持っていたのか」（序章17頁）。

評者は、著者の提案に従い（序章28-29頁）、まず第Ⅲ部から読み始めた。

現在「ウルガタ」と称するラテン語聖書のうち、旧約全書と新約福音書は、冒頭に訳者ヒエロニムスその人の序文を載せる。これを加藤は（石川立と）全て日本語に移し、註を添えて、本書の第Ⅲ部「ヒエロニウムスの言葉」とした。現行聖書の目次に拠らず、ヒエロニムスの執筆した順に文章を配列してくれるのは大変ありがたい。ヒエロニムスの言を通して、旧約ヘブライ語文をラテン語に移す際の苦労を伺い知るのみならず、翻訳作業の進捗状況（全3期）を再現することも（相当の程度）可能となる。

なお、このウルガタ序文集はヒエロニムスその人の個性を強く反映するので、よく言えば、自伝文学の類としても面白い読み物である。わるく言えば、癖が凄

い。ギリシャ・ローマ古典の引用句を、単なる修辞として随所にちりばめる。粋な文人趣味と言えれば聞こえはいい。が、ヒエロニムスの場合、そうした古典引用の多くは要するに自慢か弁解か悪口の婉曲表現で（本人としては謙虚、遠慮のつもりらしいけれども）、少なくとも評者などの耳には、粋の範囲を越えた悪趣味に響いてしまう。学者としては極めて優秀なのだろうが、どうも底意地の悪い人ではないかという印象を覚えつつ、第 I 部に進んだ。

本書の第 I 部「ヒエロニムスの世界」第 1 章「ヒエロニムスの生涯と著作」は、膨大な一次資料に基づくヒエロニムス伝である（「主要参考文献」326-330 頁を見よ）。実証史学的手法により復元されたヒエロニムスの人物像には、大いに説得力を感じた。これとよく似た人に、森鷗外がいる。自分と同じ能力を他人にも要求してしまう類の、厄介な秀才である。ただ、ヒエロニムスは世渡りの下手な分おそらく鷗外よりも意地悪ではないらしい（その点、ウルガタ序文に抱いた第一印象は改められた）。

なお、歴史学や文献学を専門とする方々からは異論もあろうが、私見によれば、ここで加藤の復元する「実際に生きていた生身の人間」としてのヒエロニムスは、案外、デューラーやレオナルドらの絵に描いたヒエロニムスと似通う。潔癖すぎるあまり実社会の周囲に対等の友人を求めて得られないとすれば、話し相手は獣（それでも、せめてライオン）か、髑髏（それでも、せめて慕ってくれた人の遺骨）か、神様くらいだろう（それでも結局、得意の語学に頼る）。こうした「夾雑物によって偶像化された聖人」に比べると、客観性を旨とするはずの近代歴史文献学に論じられたヒエロニムスなどのほうが、むしろ虚像である。少なくとも、ヒエロニムスに対して不当に敬意を欠く。

本書の第 I 部、第 2 章「教父学とユダヤ教科学の弁証法」によれば、近代の特に 19 世紀以降から今日まで書きためられた膨大なヒエロニムス研究論文の多くは（本書「主要参考文献」331-341 頁を見よ）、「ヒエロニムスの独自性」か「ヒエロニムスの語学力」を問題とする（前述「まえがき」参照）。およそ二千年にわたるキリスト教会史に教父として記憶されるほどの人に独自性がないとは思えないのだが、この場合の独自性とは、聖書解釈における独自性を意味する。ヒエロニムス本人は、旧約聖書の解釈について他と意見を異にする場合、原典へブライ語の蘊蓄を披露して自説の正当性を主張した（そして理解しない相手を回りくどく責め立てた、もとい、綺麗な言葉で批判した）。ゆえに、二つの問題すなわち「ヒエロニムスの独自性」と「ヒエロニムスの語学力」の根は一つ、「ヒエロニムスのヘブライ語能力」である。ここで加藤の整理によると、少なくとも研究史の初期を見るかぎり、どうも「有能」と評価する研究者はユダヤ人に多く、「無能」と判定する研究者はキリスト教徒（それもドイツのプロテスタント）に多いらしい。

評者としては、いずれに肩入れするつもりもない。

無能説の論拠は極めて薄弱なので、検証する以前に、何か下心でもあるのだろうかとか勘繰りたくなる（ユダヤ人は信用できないとか、ローマ・カトリックの教父がマルチン・ルター先生よりもヘブライ語に達者であったら困るとか）。

有能説の論拠は遥かに強固で、検証に値する。ただし、これには細心の注意が必要である。

まず、ヒエロニムスの聖書翻訳は一時に行われたものではない。およそ半世紀にわたる作業である。語学力は（環境と気力と体力に比例するので）時期により異なるだろう。

また、旧約ウルガタ章句のうち「ヒエロニムスの誤解」といわれる奇妙なラテン訳語の多くは、もとのヘブライ語文からして難解であるので一概に誤訳とは決めつけられない。これらの章句について、ユダヤ人の經典講釈（ミドラシュ）や説話伝承（アガダー）は、ヒエロニムスの解釈と同様の説経を保存している（本書 89-100 頁）。この事実は、たしかにヒエロニムスの極めて優秀な語学力と博識を証明するかもしれない。が、それで果たして「今こそヒエロニムスに目を向けようではないか。彼は何年もユダヤ人との付き合いを享受し、そして何にもましてユダヤ人から教えを受けようと心がけていたのであるから、[他の教父たち]より大きな収穫を我々にもたらしてくれることだろう」（ハインリヒ・グレーツ、本書 85 頁）とまで言えるかどうか、手放しには賛同しかねる。

ヒエロニムスの著作には「ユダヤ人」も「ヘブライ人」も登場する。もちろん、一般に両者を明確に区別することは不可能であるし、無意味かもしれない（デ・ラーンジュ、本書 88-89 頁）。が、ここで加藤の挙げた用例を見るかぎり、どうもヒエロニムスのいう「ヘブライ人」とは「ヘブライ語の達人」でしかないらしい。ヒエロニムスは、ヘブライ語の不得意なユダヤ人とも進んで交際しただろうか。あるいは、自分と意見の異なるヘブライ語の得意なユダヤ人を敢えて「ヘブライ人」と呼んだだろうか。

本書の第 I 部、第 3 章「ギリシア・ラテン聖書学の歴史」にも見るとおり、ヒエロニムス以前のキリスト教界は、「七十人訳」と称する古代ギリシャ語の旧約聖書を公に用いた。しかし、七十人訳のギリシャ語文と原典ヘブライ語文の対応箇所は、しばしば顕著な相違を見せる。七十人訳の權威にこだわるアウグスティヌスのような教父も、この事実までは否定していない。七十人訳の改訂、もしくは他のギリシャ語聖書を試作する者もいた。その集大成が、「不滅の天才」とヒエロニムスに讃えられたオリゲネスの大著『ヘクサプラ（六欄聖書）』である。オリゲネス自身はヘブライ語を得意としなかったが、ユダヤ人との交流を通じて、七十人訳のギリシャ語文と原典ヘブライ語文の異同を丹念に拾い、これを更に他のギ

リシャ語訳と比較した。ここで七十人訳の他にオリゲネスの参照したギリシャ語聖書は、アキラ訳、シュンマコス訳、テオドティオン訳など、いずれも個人訳である。彼らの出自は不明だが、もとキリスト者の帰化ユダヤ人であったとも、ユダヤ人キリスト者であったともいう。オリゲネスらもまた、すでにヒエロニムスと同じく、ユダヤ人との付き合いを享受し、ユダヤ人から教えを受けようと心がけていたわけである。

ただ、オリゲネスの目標は、あくまで七十人訳のギリシャ語文を改訂すること、定訳ギリシャ語旧約聖書を作ることにあつた。その場合、旧約ヘブライ語原典は事実上ただの参考文献にすぎない。ヒエロニムスは、あくまで旧約ヘブライ語原典に基づくラテン語訳聖書の作成を目標とした。これが、他の教父と大きく異なるヒエロニムスの独自性である。一見きわめて正しい翻訳態度に思われるが、そう単純な話ではない。

本書の第Ⅱ部「ヒエロニムスの思想」第1章「ギリシャ語かヘブライ語か」は、ヒエロニムスの翻訳論を整理する。加藤によれば、ヒエロニムスはキケロの翻訳論を発展的に継承し、「聖書を翻訳するときにも、逐語訳を必要とする場合を除外しないままに、自身の翻訳論としては基本的に意識を採用した」という（本書166頁以下。この判断は通説と少々異なるようだが、私見によれば、加藤は正しい）。ここで紹介されるアウグスティヌスとヒエロニムスの問答が、実に面白い。

「ヒエロニムス様、貴兄の語学力は認めます。しかし、ご自慢のヘブライ語能力については、どう証明なさいますか」「アウグスティヌス君、ありがとう。過去の論文を読んでくれれば分かると思うが、私のヘブライ語能力については、ヘブライ人に尋ねたまえ」（大意。アウグスティヌス書簡75、ヒエロニムス書簡57、本書171-179頁）。

こう要約すると身も蓋もないが、アウグスティヌスの懸念には一理も二理もある。キリスト教界の主流は、実際に、七十人訳を経由して旧約聖書を理解してきた。当然、七十人訳のギリシャ語文と原典ヘブライ語文の異同については、七十人訳を優先する。しかし、ヘブライ語原典に基づいて旧約聖書を理解するとなると、七十人訳は権威を失うので、反主流の主張に口実を与えかねない。それでも敢えてヘブライ語原典のラテン語訳にこだわるならば、その意図を説明し、正当性（正統性）を証明せよ。と、アウグスティヌスは請求したわけである。ところが、ここでヒエロニムスは、要するに「意図は他所で説明した、とにかく俺を信じろ」と言う。

この絶大な自信の根拠を、かつてヒエロニムス本人は「ヘブライ的真理 *Hebraica veritas*」と命名し（『創世記におけるヘブライ語研究』序文、本書「序章」18頁以下）、聖書翻訳論の要としたらしい（さしづめ、本居宣長の『古事記』研究

における「物にゆく道」みたいなものか)。しかし、「ヘブライ的真理」なる名称そのものは(「モノにゆくミチ」と同じく)単なる標語に過ぎず、何も証明しない。

本書の第Ⅱ部、第2章「新約聖書における旧約引用」に、加藤はヒエロニムス自身の難解な説明を、きわめて要領よく次のように整理した(本書 181-224 頁)。

ヒエロニムスは、『翻訳の最高の種類について』と題する論文で(書簡 57、本書 196-213 頁)、新約聖書(原典ギリシャ語)に引用される旧約聖書(原典ヘブライ語)の章句、すなわち新約における「旧約引用」(ギリシャ語文)と、七十人訳(ギリシャ語文)の対応箇所を比較し、その異同を以下のように分類した。

- (1) 旧約引用とヘブライ語テキストとが一致するが七十人訳のみ異なる場合。
- (2) 旧約引用、ヘブライ語テキスト、そして七十人訳がそれぞれに異なる場合。
- (3) 旧約引用のみ異なるがヘブライ語テキストと七十人訳とが一致する場合。

そして、以上の分類に基づき、七十人訳ギリシャ語文の出来を判定した。

- (1) の場合、七十人訳は誤訳であるという。
- (2) の場合、七十人訳は意識であるという。
- (3) の場合、七十人訳は直訳であるという。

しかし、加藤の鋭い指摘によれば、ここでヒエロニムスは次の場合を論じない。

- (4) 旧約引用、ヘブライ語テキスト、七十人訳が全て一致する場合。
- (5) 旧約引用と七十人訳とが一致するがヘブライ語テキストのみ異なる場合。

なぜか。前者については、そもそも論ずべき問題が存在しないからであろう。

しかし、後者については、ヒエロニムス『イザヤ書注解』に論じられる(本書 220-222 頁)。

- (5) の場合、新約聖書における旧約引用は、七十人訳と共に、意識であるという。

つまり、七十人訳について、これを「誤訳」「意識」「直訳」と判定する基準は実のところ旧約ヘブライ語原典ではない。新約ギリシャ語原典である。

こうして見ると、「真理は“ヘブライ語”原典にある！」(本書帯の巻句)のではない。むしろ「旧約“ギリシャ語”七十人訳原典は新約“ギリシャ語”原典の真理を証明しない」、「旧約“ヘブライ語”原典は新約“ギリシャ語”原典の真理を証明する」。厳密に言えば、「真理の典拠は“ヘブライ語”文書であった！」。これが、ヒエロニムスの「ヘブライ的真理」に込められた主張であろう。そして、「ヘブライ的」なる形容詞を抜きにした「真理」自体は、文献学上の「正解」であると同時に、いわばキリスト教神学上の「公理」、すなわち「キリストの福音」を意味したと思われる。

本書の第Ⅱ部、第3章「ヘブライ人、使徒、キリスト」は、さきの第2章を承けて、新約聖書における旧約引用の諸問題を論じる。これを解決するヒエロニムスの手際については、加藤の叙述に譲る。必読。ただし、注意！現段階ではヒエ

ロニウムの結論を肯定しても否定してもいけない。まずは、結論に至る理路の確認に徹するべきであろう。

加藤の提案する「すべての旧約引用箇所に関するヒエロニウムの議論の検討」、および「ヒエロニウム『ルフィヌス駁論』とルフィヌス『ヒエロニウム駁論』との相互補完的な研究」は（本書「終章」249-255頁）、キリスト教神学、教父学のみならず、旧約聖書学、新約聖書学においても真剣に取り組みたい問題である。また、ヒエロニウムを個性豊かな文人として、ウルガタを一個人による翻訳文学の傑作として、世界文学史の観点から捉え直してみてもよいと思う（鴎外『ファウスト』は、すでにゲーテ原作と別の価値を有するように）。

この機会に、評者は説話学の立場から、例題としてヒエロニウム書簡 34 の調査を提案したい（本書 181-182 頁）。

書簡 34 の第 2 節に、ヒエロニウムは、あるヘブライ単語を指して「このように真理が真理そのものを持っているので (cum ita se veritas habeat) 」と述べたらしい。しかし、そのヘブライ単語を加藤は紹介していない（本書の文脈には関係ないので、別に不当ではない）。

問題のヘブライ単語は、旧約詩篇 127:2、lehem hā `ašābîm の `ašābîm すなわち明治元訳「辛苦の糧」の「辛苦」である。が、ヒエロニウムによると、これを「辛苦」と訳すのはよろしくない。詩篇 135:15、`ašābbē haggoyîm の `ašābbē すなわち明治元訳「もろもろのくにの偶像」と同じく（真理が真理そのものを持っているので）ここも「偶像」を訳語とすべきであるのだ、という。

ちなみに、七十人訳は、前者を odyne (辛苦)、後者を eidōla (偶像) と訳し分けていた。

たしかに、`ašābîm も `ašābbē も同じ単語（活用を外せば基本形は `ešeb、語根 `šb) であるらしいから、同一の訳語を充てよ、という主張は分かる。

しかし、それならば、どちらも「辛苦」と訳したっていいではないか。あるいは、同音異義語だったらどうする。いや、もしかすると「ヘブライ人」にとっては辛苦も偶像も似たようなものだったかもしれない。このあたり、ラビ文献やユダヤ説話を漁れば（「ヘブライ人に尋ねたまえ」とヒエロニウムも勧めている）、いろいろ面白い議論ができるだろう。

最後に、要望を記して終わる。

本書の浩瀚な主要参考文献表は、残念ながら、『舊約聖書ウルガタ全譯』全 4 巻（光明社、第一巻 1954 年、第二巻 1955 年、第三巻 1957 年、第四巻 1959 年）を挙げない。第一巻の「序」と「出版社の序」を一部引用する。

[前略] 光明社の責任者で博学のエウセビオ・ブライトン師は、その右腕

ともたのむ川南重雄氏とともに、旧約聖書邦訳に全力を傾けてきた。[後略]
(第一巻「序」)

「旧約聖書のカトリック大衆版」たる本書は、正確と認められているラテン語ヴルガタ訳をもととし、一語一語精通者の校閲を仰ぎ、逐語的に訳出した。[後略] (同「出版社の序」)

いま読む人は少ないが、日本語聖書翻訳史上、貴重な作品である。また、これこそ日本におけるヒエロニムス研究の嚆矢であるとも言えるのではないか。出版界不況の中いろいろ大変だろうけれども、この際、復刊されて加藤の名著と共に読み直されることにでもなると楽しい。